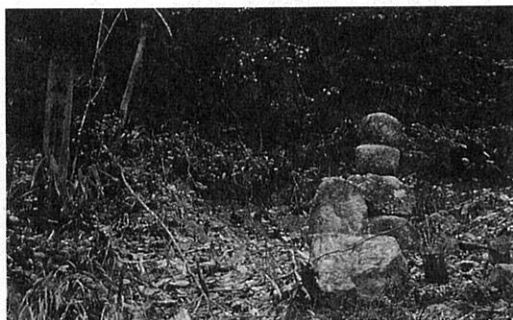




大山清水



大山峠



大山刀鍛冶の墓

(二) 道筋と現状

1 大山峠から中野まで

江戸時代宿駅であった西条四日市(現東広島市)から広島方面へ旧山陽道を下ってくると、瀬野町の東、八本松川上の西南部に位置する大山峠を越えなければならぬ。古代律令制のもとで、京から大宰府に通じる大路として山陽道に駅制が整えられたが、この大山峠あたりが古代の大山駅に比定されている。「万葉集」の「まきのはの、しなふ勢能山、しぬはずて、吾越え去けば、木の葉ちりけむ」という歌にでる勢能山は、この地のことと伝え、南北朝時代に九州探題に任じられた今川了俊もここを通過している(「道ゆきふり」)。江戸後期の『築紫紀行』には「海山を見晴して眺望に心目を樂しめ、木陰の清風に襟を抜き身を休め」とあるが、通行の途絶えた今は峠道は雑草が繁茂しており、頂上も木々に囲まれ、何の眺望も得られない。頂上から一〇メートルほど下ったところに小さな清水がわいている。「大山清水」といわれるここには茶店がおかれ、旅人の疲れをいやしたことを彷彿とさせる。

旧山陽道はこの大山峠を下る途中で広島市域の安芸区瀬野川町上瀬野に入っていくが、その少し手前の道脇に大山刀鍛冶の墓と伝える小さな石墓がある。大山刀鍛冶は、建武の頃、筑前の左一派が来往したものといわれ、中世の芸州を代表する刀工で、県重文指定の刀の銘には、「芸州大山住宗重作 永祿十一年八月吉日」とある。

広島方面からの上り口の所には、「代官おろし」とよばれた場所があるが、その急峻さから名づけられたものである。この大山峠は、また民謡「瀬野馬子唄」を生んだ所でもあり、馬子たちが急峻な峠道を唄を歌いながら上下していたことが察せられる。

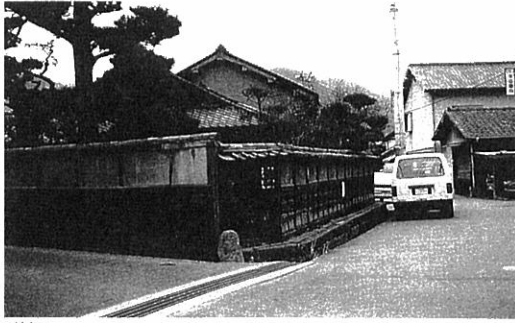
瀬野馬子唄

瀬野の三里とエー

大山の峠とヨー

瀬野の馬さはサー

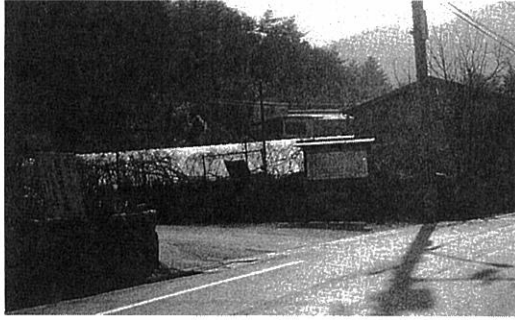
金つき馬でヨー



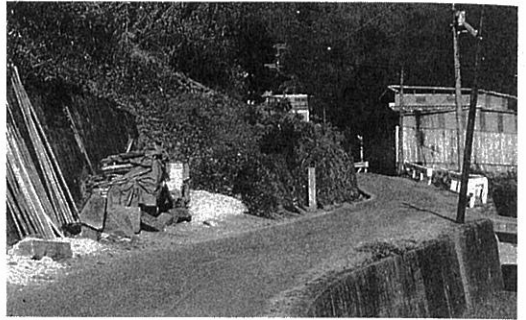
道標



大山峠



紡績工場跡



涼木一里塚跡

大須なわてがなげにヤエー 夜になつてもせいをだす

峠を降りると清谷の集落をへて一度国道二号線に出るが、すぐ左に入り込んでふたたび二号線と出会う。二号線を横切り、久井原橋で瀬野川を渡る。『行程記』には、橋を渡ったすぐのところ、四本の街道松が描かれている。瀬野川を左にみながらしばらく行くと、『芸藩通志』絵図に描かれている涼木の一里塚があるが、今はライオンズクラブの建てた標柱があるのみである。さらに二号線を左手にその喧騒から離れてしばらく行くと、また二号線と斜めに交差して上瀬野村一貫田にいたる。典型的な街道型集落で、今もその名残をとどめている。『芸藩通志』には藩の御茶屋が街道筋右手に記されている。これが『行程記』に描かれる小休所と見られる。『行程記』には「この酒屋御小休所、左右茶店多し、この孫兵衛、先祖は東川向この庄屋平田屋孫兵衛といふ者、先年当所に出店したるゆへ所名を出見瀬と名付く」とあるように、以前は出見瀬という名前だったようである。

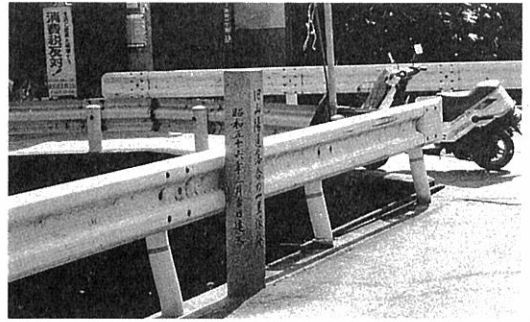
この一貫田で熊野跡村へ至る熊野跡往還が分岐している。交差するその角には、大正期の小さな道標が人知れず立っている。熊野往還の方へしばらく行くと、『芸藩通志』に武田長門が宇佐(大分県)から勧請したと伝える八幡宮(平山神社)があり、さらに先へ進んだところに、今ではちよつとわかりにくい官立の綿糸紡績工場跡がある。いまは往時の姿をとどめないが、近代日本の一頁を刻んだ産業遺跡である。

#### 官立綿糸紡績工場跡(県史跡)

明治初年、殖産興業の一環として明治政府は各地に官立工場を設置したが、紡績関係で設置されたのが、三河木綿・安芸木綿で江戸時代からその名を知られていた愛知県と広島県である。広島工場の場合、動力が水力ということから、江戸時代水車による油絞りの実績をもつ瀬野川上流の一貫田が選ばれたが、水量の関係から当初の計画より二キロメートルほど上流の荒谷に明治十五年(一八八二)竣工した。しか



専念寺

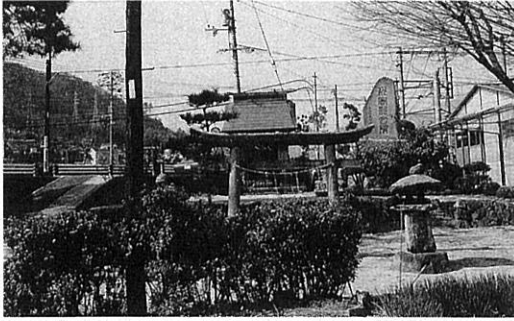


落合の一里塚跡

し、同年には士族授産を目的とする広島綿糸紡績会社に払い下げられたため、官立模範工場としての役割を果たすことはなかった。荒谷でもイギリス製の二〇〇〇錘紡機に見合う水量が得にくいこともあって、運転休止に追いこまれ、明治十九年には広島区河原町に移転してしまつたので、現在では工場敷地の石垣や、水車に通水する水門、調節口などが残っているにすぎない。

もとの旧山陽道筋にもどって先へ進むと、一貫田につながる上瀬野に至る。明治二十七年（一八九四）山陽鉄道開通と同時に設置された瀬野駅を右手にみながらしばらく行くと、上瀬野村をあとにして下瀬野村へと入っていく。下瀬野村に入るとまもなく一里塚のおかれていた落合に至るが、その名残は今はない。ここから国道二号線を横切る形で山手に向かって分かれていく道が、立石を経て畑賀の水越峠をこえて安芸府中へ抜ける古路である。

旧山陽道が下瀬野村を通るのは距離的には短く、まもなく国道二号線を斜めに横断し山陽本線を越えて中野に入っていく。この地の荒山に比定されているのが『延喜式』にみえる古代の荒山駅である。古代山陽道は先にみた東広島市の大山駅からこの荒山駅に至り、西国街道筋から山手に入り込んで畑賀村を通り甲越峠を越えて次の安芸駅（安芸郡府中町下岡田に比定されている）に至るとされている。中野に入って瀬野川の右岸を山陽線に沿う形でしばらく行くと、広島電機大学前をすぎたところに天保十三年（一八四二）の鳥居をもつ愛宕神社がある。さらにしばらく行くと街道筋に、この地域に四〇〇年ほど君臨していた阿曾沼氏の家臣が入り禪宗から浄土真宗に改宗したとされる専念寺がある。阿曾沼氏は、承久の乱後、地頭職を任じられた鎌倉御家人で、はじめは代官を派遣して瀬野荒山荘の支配にあたった。瀬野荒山荘は、太政官厨家への納物未納分の代替として建久八年（一九七）立券された荘園で、だいたい中野・畑賀あたりの一円がその場所に比定されている。阿曾沼氏は、その後南北



天神宮



松並木

朝の争乱を期に本貫の下野国(栃木県)からこの地に移住し、鳥籠山城を拠点に国人領主として成長し、一時大内氏軍門に下ったこともあったが、のち毛利氏の有力家臣となった武将である。

専念寺近くの道を一〇〇メートルほど上ると矢口神社がある。「行程記」は、この近くに「阿曾沼豊後守元秀」の石塔があると記している。

安芸中野駅を過ぎて山陽線の踏切を渡って瀬野川沿いにでると、「出迎えの松」といわれる松並木が見えてくる。これは街道筋のまもった松並木の名残で、瀬野川沿い約三〇〇メートルの間に二〇本近いクロマツがある。参勤交代を終えて帰国してきた広島藩主を、家臣などがここで出迎えたといわれており、そのうち六本が市史跡に指定されている。ここを通り過ぎてまっすぐ行くと畑賀川にかかる砂走橋にでる。正確には砂走橋の手前から安芸郡海田町に入る。

砂走橋を渡らずに川岸を右手に行くと、蓮華寺山の登山道となっているが、途中山陽本線とぶつかるところに小さな社(天神宮)がある。幕末の嘉永二年と刻銘された鳥居があり、傍に大正十五年(一九二六)九月におこった畑賀川氾濫にともなう列車の脱線転覆事故によって死傷者七〇名を出した石碑が建てられている。

またこの先に見える山の麓には、阿曾沼氏が居城とした鳥籠山城跡があり、さらに阿曾沼氏の祈願所と伝える蓮華寺山に至る。「芸藩通志」によると、当時すでに廃寺であった蓮華寺は、大同元年(八〇六)空海の開基と伝え、往時は中野・畑賀両村にまたがってかなり大規模な伽藍を有していたようである。現在は市民の憩い場として、県の緑地環境保全地域になっている。

(藤沢 勇)